

はじめに

この本を手にとってくださった方は、スポーツ観戦好きか、スポーツウォッシングという現代的な問題に関心があるか、のおそらくいずれかでしょう。そんな皆さんならよくご存じのとおり、「スポーツウォッシング」という言葉を日本でも目にするようになったのは、確か2020年の春あたりだったでしょうか。この年の夏に開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックが新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延^{まんえん}で1年延期になった頃から、スポーツの爽やかで健康的なイメージを利用して社会に都合の悪いものを覆い隠し洗い流してしまう行為、という意味をあらわすこの用語が、ちらほらと一部の活字メディアなどで取り上げられ、少しずつ注目されるようになりました。

しかし、それからしばらくの時間が経過しても、少なくともこの日本では、スポーツウォッシングに関する考察や議論が進んでいるとはいえない状況のようです。

たとえばスポーツウォッシングという言葉に興味を抱いて、理解を少し深めようとしても、これについて記された書籍はどこを探しても見つかりません。また、スポーツチャンネルやニュース番組などでも、この切り口でテーマを取り上げて議論している気配は、まったくありません。

それならば、いっそのこと自分自身で調べ、取材を進めていきながら、この問題について考えを掘り下げてみよう。そう思って集英社新書編集部に相談してみたところから、この企画がスタートしました。

冒頭にも記したとおり、スポーツウォッシングという行為は一般に、「為政者などに都合の悪い社会の歪^{ゆが}みや矛盾を、スポーツを使うことで人々の気をそらせて覆い隠す行為」と理解されています。これは稚拙な陰謀論や為にする批判のための批判などではなく、自分自身がスポーツの現場で長年取材をしてきた経験と照らし合わせてみても、実際に世界のあちらこちらで発生していることです。

では、スポーツウォッシングというものはどういうメカニズムで作用し、誰が誰に対してどのように働きかけ、これによっていったい誰にどんな弊害が生じるのか。また、スポ

ーツの世界に関わる当事者たちは、この問題をどう捉え、どうすればどの程度どんなふうには正していくことができるかと考えているのか。考え始めれば次々と湧いてくるさまざま
な疑問を、スポーツ界に関わりが深く、スポーツと社会に関する深い知見を持つ人々に訊
ね、また、自らの取材経験などをもとにして考察を進めてゆきました。

取材を進めてゆくにしがたい、現代社会とスポーツが接するところに生じるさまざまな
問題点が、少しずつハッキリとした像を結んできました。

スポーツに政治を持ち込んでほならない、と人々が言うときの〈政治〉とは、何を指し
ているのか。国家的プロパガンダや偏狭なナショナリズムの圧力から距離をおき、自由と
可能性の象徴であるはずのスポーツが、平等な人権を求める声を政治的発言と見なして抑
圧するようになっていったのはなぜなのか。行動するアスリートたちの存在を疎ましく思
っているのは誰なのか。日本のアスリートたちは、どうして何も発言しようとしなかったのか。
彼ら彼女らをそうさせている、すなわち「ひたすらスポーツに集中する」ことを求めている
のはいったい誰なのか。

そこには、誰の目にもわかりやすい絶対的な巨悪が隠れているわけではありません。大

きな問題から人々の気をそらし洗い流そうとする（社会的洗濯行為^{ウオッシング}）のツールとして、爽快で愉快で痛快なスポーツが利用されるのは、スポーツに対する我々の理解が、洗濯行為をしようとする人々にとって都合のよいものになっているからです。つまり、スポーツイベントを開催する運営組織やそこで競技をするアスリートたち、それを報道するメディア、そして競技会場や家庭でスポーツを観戦する我々の、類型的で窮屈で旧態依然としたスポーツの捉え方こそがこのような洗濯行為を可能にしている、というわけです。

なぜ、そんなことになってしまうのか。では、どうすればいいのか。現代のスポーツが抱える矛盾や問題の数々と、我々がそれに向き合っていくための具体的な方法は、スポーツウォッシングの構造を解き明かす試みの第一部と、さまざまな専門家や研究者諸氏に問いを投げかけた第二部を読み進んでいただくことで、少しずつ浮き彫りになってくるでしょう。

なかでも、4年に一度の祝祭として開催される世界最大のスポーツイベント、オリンピックは、スポーツウォッシングの最も象徴的で典型的な事例です。一都市での開催がもはや不可能になりつつあるほど膨れ上がり続けている大会予算、ナショナルリズムを刺激する国家枠という参戦形式の限界、その舞台で戦うアスリートたちの目的と意義。そしてそも

そも、オリンピックとは現代の人間社会にとってどういう存在なのか、等々。これらの課題は各章でさまざまに問題提起され、特に元オリンピックアンで日本オリンピック委員会（JOC）理事を10年間務めた山口香氏との長い一問一答では、問題の本質とこれから向かうべき方向がつまびらかにされてゆきます。

また、本書の取材過程では、日本のスポーツ報道が、たとえば欧州諸国と比較して窮屈で類型的な枠に押し込められがちなる理由の一端も、少しずつ見えてきたように思います。

本書は、おそらく日本初の、そしてひよっとしたら世界でも類のない、「スポーツウォッシング」をタイトルに冠した書籍です。

「スポーツウォッシング」を俯瞰的に捉えようとする本書の試みが、プロスポーツをスポーツファンがより成熟したかたちで愉しめるようになるための、そして、自分自身がプロアマを問わずスポーツに関わる際にはより良いかたちで競技にアプローチしていくための一助になれば幸いです。

では、これから皆さんとともにスポーツウォッシングをめぐる考察をスタートすることにしましょう。

目次

はじめに

3

第一部 スポーツウオッシングとは何か

第一章 身近に潜むスポーツウオッシング

15

スポーツウオッシングを有名にした本

なぜ2000年代に入って中東諸国がスポーツ招致に力を入れ始めたのか？

現代の「奴隷労働」、中東の「カファラシステム」

欧米メディアでは2010年代終盤頃から報道され始めた

第二章 スポーツウオッシングの歴史

37

最も有名なスポーツウオッシング、1936年ベルリンオリンピック

アリ対フォアマンの「キンシャサの奇跡」もスポーツウオッシングだった？
女子サッカー選手たちがオリンピックで人種差別に抗議

第三章

主催者・競技者・メディア・ファン

四者の作用によるスポーツウオッシングのメカニズム

スポーツウオッシングを構成する4つの要素

フォーミュラEレースも事件のウオッシングに利用された？

仕掛けられたウオッシングに対抗するには

第二部

スポーツウオッシングについて考える

第四章

「社会にとってスポーツとは何か？」を

問い直す必要がある

——平尾剛氏に訊く——

オリンピックは成功だったと言いつ張る東京都

学会でも反対するなという同調圧力

アスリートにはもつと声を上げてほしい

競技スポーツと生涯スポーツ

20世紀的マーケティング思考から変わり始めたスポンサーたち

第五章

「国家によるスポーツの目的外使用」

その最たるオリンピックのあり方を考える時期

——二宮清純氏に訊く——

国威発揚としてのオリンピック

メディアが〈勇氣と感動のドラマ〉を流し続けることの罪

スポーツに対する「固定観念」を外さなければならない

第六章

サッカーワールドカップ・カタール大会と

スポーツウオッシング

議論を呼んだサッカーワールドカップ・カタール大会

日本サッカー協会からの回答

一部のメディアは取り上げたものの……

第七章

テレビがスポーツウオッシングを

絶対に報道しない理由

——本間 龍氏に訊く——

137

なぜテレビはスポーツウオッシングを報じないのか

テレビはスポンサーの機嫌を損ねることは絶対にしない

大坂なおみの行動に対するNIKEと日清食品の姿勢の差

電通抜きではオリンピック開催は無理。贈収賄・談合はまた起こる

第八章

植民地主義的オリンピックはすでに

〈オワコン〉である

——山本敦久氏に訊く——

153

F1ドライバーもMotoGPライダーも声を上げた

日本のスポーツ界には「社会」がない

スポーツの常識とされるものが、そもそも政治的に偏っている

政治ではなく人権の問題

オリンピックは各国の公金を食いつぶしていく植民地主義経済

第九章

スポーツをとりまく^{ふる}旧い考えを
変えるべきときがきている

——山口 香氏との一問一答——

日本の選手はなぜ自分の意見を言えないのか

政治とスポーツは切り離せるのか？

「個人の資格でもオリンピックに参加する」という日本選手はいるのか？

アスリートの姿は日本国民の映し鏡

スポーツは国家の枠組みから逃れられないのか

スポーツは、世界に変化のさざ波を起こし続けていける！

スポーツが国家やジェンダーの枠組みを超えていくために必要なこと

スポーツとオリンピックの新しいありようを考える

おわりに

225

引用・主要参考文献

232

章扉作製・図版レイアウト／MOTHER